

## 論文審査及び最終試験結果報告書

課程博士	地域社会研究科 地域社会専攻 地域文化研究講座		
学籍番号	13GR105	氏名	下田雄次
審査委員	主査	山田 厳子	
	副査	今田 匡彦	
	副査	杉山 祐子	

### (論文題目)

「民俗芸能」の「現在」－生活の中の実践と客体化－

### (論文審査の要旨)

本論文は、1975年の文化財保護法の改正、1992年の「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」以降の「民俗芸能」を対象とし、地域の日常と芸能との関わりを論じたものである。芸能の場で受け渡される技術や価値の共有、関係性の構築などは、当事者が意識化したり言語化したりすることが難しいものである。そこで、本論では、レイヴとウインガーの「正統的周辺参加」の議論を前提に、岩木山麓の地域で長く民俗芸能に携わり、技術を身に付けているという論者の資質を調査に活かす方法を採用した。具体的には、既に参入している芸能の集団で新たな技術を身に付けてゆく過程、新しい芸能集団に参入してゆく過程、「援助者」として集団に参入し、失われた芸能を復元してゆく過程と、集団の中で立ち位置を変えながら、その場での相互行為を映像によって記録し、分析してゆくという方法をとった。その結果、部外者からは見えにくい芸能と日常のつながりが明かとなった。

「芸能と身体に関わり」では、芸能には「典型的な身体技法」が存在し、その身体技法は芸能の所作の基礎である以前に日常を支える身体の用い方であることを、岩木山麓で現在行われている生業の身体技法の記録と、一人立ち三匹獅子舞を習得してゆく過程での記録を比較検討することから明らかにした。さらには近代の産業社会に適応する身体を獲得した結果、民俗芸能に繋がる身体から遠ざかりつつある現状を資料を示しながら論じた。「人々の生活世界から立ち現れてくる芸能の姿」としては、岩木山登拝行事終了後の「余興」の場での実践を分析し、誰もが芸能に関わることが可能な空間では、芸能の持つ意味が多岐にわたることを示し、その一端として芸能を通した新たな関係性の構築と日常の関係性の一新といった例を示した。「地域と芸能の関係」では、芸能の上演には、演者以外の地域の人々も五感を働かせた相互行為によって演者たちと関係性を構築していくことを七戸町上原子集落の剣舞に参入していった過程を分析することで明らかにした。さらには失われた芸能の復元に援助者として関わった実践の分析から、芸能の復元にはそれを可能にする日常の関係性やそれを作り出す「場」の復元が不可欠であることを明らかにしている。

### (最終試験結果の要旨)

本研究は、実践者と分析者を行き来する方法を採ることで、日常と芸能のつながりを明らかにしたもので、従来の研究に一石を投じるものである。豊富な映像や写真は資料としての価値も高い。当事者たちにとっての芸能の持つ意味を探りながら、援助者という立場で芸能が復興してゆく過程を記録・分析した第6章は、人文社会科学系の学問が地域に貢献する一つの可能性を示したものとして高く評価できる。以上のことから審査委員全員一致して合格と判断した。